
戦士の試練

あきほり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦士の試練

【Nコード】

N4060U

【作者名】

あきほり

【あらすじ】

暗闇の中の試練の道、戦士はたった一人で試練に挑む。

(前書き)

※この掌編は某匿名掲示板某スレにて練習用にお題を募集して書き、スレに晒した内容に漢字表記の統一や内容の追加など微調整を加えたものです。

「本当に一人で行くの？」

心配そうな顔をしてると思う。暗いからよく見えない。

「だいじょうぶ、一人で行くよ」

そう言いながらも、戦士は扉を開ける手が震えていたことに気付いていた。

一人で行く――。

精一杯に勇気を振り絞って出した言葉だったが、一人で行ける、とは言えなかった。

ああ、無理やりにも行かなければ。一人で行かなければ意味がない。

今日ばかりは恐怖から目をそらしちゃいけないのだ。

しばらく立ちすくんでいたが、ようやく彼は静寂と暗闇の荒野に足を踏み入れた。

ひんやり冷たい空気が体を襲い、不気味な雰囲気をつつそう深めている。

恐怖で体が身震いしたが、同時に自分の体が動かせることを思い出し、ゆっくりと首を上げた。

「……遠いな」

先は殆ど見えない。そっと呟いた言葉は遠くへ響くことなく、凍りついたまま足元に落ちた。

沈んだ言葉を追ってまた首を下げそうになったが、何とか思いとどまる。

頑張れ、とどまれ、決意したのだ！　ゴクツと息をのみこみ、その勢いで顔を前へ向けて改めて覚悟した。

この暗闇を、乗り越えなければならぬ。そうだ、何故ならもう――残された時間は少ない。

一歩踏み出す。冷気の壁を打ち破った足はひどく重かった。

だが、ここで止まってはいけない。二歩、三歩と歩を進める。

張りつめた静寂の世界には魔物の潜む気配を感じたが、幸いにもそれが襲いかかってくることはなかった。

「……そういえば」

魔物の事を考えていると、同時に友の顔が頭に浮かんだ。歩を進めるとともに頭が回ってきたのだろうか。

あるいは何か考えていなければ、恐くて歩みが止まってしまうのかもしれない。

いや、いや。恐怖を確認してもいいことはない。更なる恐怖が襲い来るだけだ。自分に言い聞かせた。

一人になって初めて気付いたことがある。いざというとき、何より役に立つのは経験だ。

自分の経験、親の教え、友の言葉。それが幾度も危機を救ってくれた。思い返してみればこの人生、誰かに助けてもらうことばかりだった気がする。

考えてみれば、孤独な戦士に手を差し伸べてくれるものはいないが、今も戦士を助けてくれる沢山の思い出はある。少しでも心強くなった。

そうだな、友は何と言っていたっけ。

「とっても大きいんだよ。黒くてね、そりやもう！」

「ずっとこっちを見てるんだ。いや、僕の後ろにいたから見てないけど、多分ね」

「頑張って走って逃げたらね、まあ…なんとか。だけでもう絶対にダメだと思ったんだよ、本当に！」

友は実際に魔物と遭遇した。何とか無傷で生還してきたものの酷く混乱していたから、話もあまり鮮明なものじゃなかった。

それでも友の話から魔物の姿を想定することはできた。また、魔物の習性も教わった。

魔物は色が黒く、とてつもなく大きい。そして何より恐ろしいのが、敵は闇に乗じて背後から襲いかかるのだそうだ。一度捕まってしまうば決して敵う相手ではないだろう。

しかし、大きな体、背後から襲いかかる習性。そして友の言葉から一つの希望を見出すことはできる。

恐らく、魔物は足が遅いのだ。

自慢ではないが、足の速さなら友には負けない自信がある。友でさえ逃げ切れたのだから、常に用心していればきつと逃げ切れる。

恐怖に凍えていた体も既に熱を取り戻した。今なら走れる——大丈夫だ。

戦士は立ち止まった。ここから先は不用意に進めば深淵の闇の中に落ちてしまう危険な場所であることを戦士は知っていた。

道は地下へと続いている。

足場を一步一步確かめながら、確実に下層へと進む。

さつきよりも狭くなり足場の悪くなった道と闇の中に渦巻く悪意の念は命あるものを寄せつけようとしない。もしここで魔物に遭遇したら逃げ切れるだろうか。

戦士が足取りを速めた理由は二つ。ひとつは、彼の一握りの勇気

にようやく火がつき始めたからである。

そしてもうひとつ、それ以上に、眼前の不気味な谷が彼の焦燥感を煽っていた。

その時、はやる気持ちと少しの油断が戦士に牙をむいた。

少しだけ大きく出した足は地面を踏むことなく、彼の視界は黒に染まった。

（まずい！ このままでは、落ちる！）

必死になって両手を伸ばし取っ掛かりを探す。

（痛い！）

頭部と左手に激痛が走る。かろうじて右手は棒状の何かを掴み彼は一命を取り留めたが、空を切った体は勢い余って壁へと激突したのだ。

だが、その痛みが彼に冷静さを取り戻させてくれた。痛みを耐えながら左手も右手と同じものを掴む。

（泣くな、耐えろ！）

溢れそうな涙をどうにか堪えて、暗闇の中で自分の在り処を確かめる。緊張をのみ込むように深く息を吸って、息を止めたまま、また数歩踏み出す。

しばらくして吐いた息は、安堵を意味するものに変わっていた。そう。遂に、戦士は最下層へと辿りついたのだ。目的地は近い。

そういえば、もうどれくらいの時間が経ったのだろうか？ 刻一刻

と迫る危機をその身に感じて、ふとそんなことを思う。

そんなことを考えられるのだから、随分と余裕が出来たものだ。

最下層まで降りてしまえば、もはや障害は少ない。目的の扉が視界に入った時、彼は肩の荷が下りたような気分だった。ここまできて、幾分か強くなった気がする。

彼は立派な戦士の誇りを手に入れたのだ。

もう恐れることもない。目的地まで今度は悠々と歩みを進めた。

そして――

後は戻るだけである。しかし、それが戦士に待ち受ける最後の試験だった。

一本の道を辿ってきたということは、そこを引き返すということは……。

後ろを振りかえらなければならない。前だけを見つめ続けてきた今までとは違う。

背後には魔物がいるのだ。

けれど戦士はもう恐れることはなかった。奮い立つ体は既に静寂をはねのける強さを手にしていた。

この短時間で彼は立派な戦士の鎧を纏うことが出来たのだ。

「終わった。帰ろう」

戦士は思い切って振りかえった。まさにその時。

彼の耳元に囁きかける魔物の声が聞こえた気がした。

冷たい風が全身を舐めるように纏わりつく。着飾った鎧は一瞬にして崩れ落ちた。恐怖が遂に牙をむいた。

（魔物だ！ 魔物がいる！ 後ろだ！）

友の言うとおりであった。背後に感じた気配は捕えることの出来ないほどに大きく、闇の中では存在を確認することも出来ない。間違いないのは、振り返ってはいけないということだけだ。

（走れ！ 走れ！）

先ほど堪えた涙が一斉に押し寄せてきて、視界が悪くなった。もう前に向かっていているのかどうかも分からないのだが、それでも必死に走った。

上層へ上る途中に足をぶつけたが、痛みを感じている暇などない。何かが背中を押した気がして思わず悲鳴をあげてしまった。すでに戦士の誇りは型無しである。

だがそれでも懸命に走って、ようやく彼は最後の扉を見つけ出した。

（あった、扉だ、帰れる！）

彼は扉を開けて逃げ込み、後ろを振り返ることなく、手だけで扉を閉めた。

やった。終わった。遂に安息の地へと帰ってきた。誇りも置いてきてしまったが、それでもたった一人で目的を達成したのだ。

震える体をなんとか落ちつけて顔を上げると、目の前にはずっと会いたかった人が待ってくれていた。

「ゆう君、大丈夫だった？ 怖くなかったの？」

「だいじょうぶだったよ！ 一人でトイレ行けたもん！ 暗いの、

だいじょうぶだよ!」

「そう? 無理しないでいいのよ。階段上がってくる音が凄い焦ってるように聞こえたけど」

「焦ってない、漏らさなかったし!」

何とか冷静を装って弁解するが、息はもう絶え絶えで、余裕などどこにも無い。

しかし母はそれを指摘することなく、優しく彼――少年を抱きしめた。

「だって僕もうお兄ちゃんになるんだもん、暗いところなんて一人で行けるよ。ねえお母さん、赤ちゃんまだ生まれないの?」

「まだね。だって赤ちゃんがいるって分かったのは昨日だもん。まだまだずっと先……多分、ゆう君が小学校に入る方が早いと思うな」

「そうなの? 僕はだいじょうぶだよ。これから一人でも怖くないし、赤ちゃん生まれるときはもっと強くなってるよ!」

「そうね、赤ちゃん生まれたら、ゆう君が守ってあげてね」

「うん! ねえ赤ちゃん、君が夜一人でトイレ行くの恐かったら、僕がついてってあげるからね! あ……ふぁ、なんか眠くなってきた」

「お兄ちゃんになるって、ちょっとプレッシャー感じて疲れちゃったのかな」

「……うん。あの、お母さん……赤ちゃんいるけど、僕お母さんと一緒に寝ていい」

「ふふ、赤ちゃんが生まれるまでは、ゆう君だけのお母さんなんだから。まだまだ甘えていいのよ。ちょっとずつお兄ちゃんになれればいいの」

「うん……ありがとう」

こうして、勇敢な戦士のたまご、少年ゆう君の戦いは終わった。明日は友に自分の冒険譚を話すつもりだ。僕は怖くなかった、と言ってやろう。ちょっとくらい強がって嘘をついたっていいよね。だって僕はもうちょっとで、本当に強くなるんだから。

でも今はもうちょっとだけ、お母さんのそばで眠っていたいな。

(後書き)

処女作なのでお見苦しい点もあると思いますがご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4060u/>

戦士の試練

2011年10月9日10時24分発行